

山川登美子の歌(1)：「白百合」全訳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越野, 格 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1417

山川登美子の歌(1) — 「百合」全釈 —

越 野 格

(1)

平成十八年十一月から翌年一月にかけて、若狭図書学習センターを主な会場として、「平成18年度福井ライフ・アカデミー郷土学習講座 若狭路探訪VI part 2 若狭に生きた女性たち」と題する、五回続きの講演会が開かれた。「神明神社と若狭の八百姫伝説」「常高院の生涯と若狭小浜」「木戸松子（幾松）の生涯」「樋口一葉と敦賀」と続き、平成十九年一月六日の講演が「山川登美子 ふるさと小浜と歌の世界」であった。この演題の講演者は、私である。

山川登美子をテーマとする講演依頼があった時、私は門外漢ゆえお断りしたが、何度かの遣り取りの末に引き受ける羽目に陥った。私には話すべきテーマがないので、センターにお任せしたところ、与えられたのが「山川登美子 ふるさと小浜と歌の世界」、であった。当初要請された講演日は、十二月七日。これも種々調整した結果、正月明けになってしまった。

「郷土学習講座」開講の目的は「才知あふれ波乱の生涯を送った若狭にゆかりのある5人の女性について学習する機会を設け、ふるさとに対する認識を深めるとともに、地域作りの視点を養う」というもの。「山川登美子の歌の世界」を「ふるさと小浜」との関連で論じること、これが私に与えられたテーマである、と理解した。

まず、坂本政親編著『山川登美子全集上下巻』（文泉堂出版 平成6・1）を繙くことにした。講演までは二ヶ月余りあったが、本務を抱え、年度末ということもあり、集中的に勉強できるのは二週間足らずしかなかった。勉強時間が足りないせいか、なかなか結論が見えて来なかった。「山川登美子の歌の世界」は臆気ながらも感得できたが、登美子にとっての「ふるさと小浜」が見えて来ないのである。一般的な小浜の歴史・文化なら、諸書を参照して概括することはできる。父貞蔵と登美子との関連も概括できる。だが、登美子の短歌の中で、小浜がいかに表現されているのか、小浜がいかに歌われているのか、纏まった結論が何も見えて来ないのである。次

第に登美子の歌に、具体的に、写実的に若狭・小浜を歌ったものがあつたのだろうか、果たして登美子の歌を写生歌的視点から鑑賞することは妥当なのだろうか、と思うようになった。

要請に添った演題の結論が見えぬまま、十二月末、資料(レジュメ)をセンターに送付しなければならなかった。送付した講演の構成は、「一始めに―問題のありか」「二習作期―若狭八景、青井山など」「三鉄幹との出会いと別れ」「四『恋衣』」「五『雪の日』『日蔭草』辞世の句」、であつた。資料は、『山川登美子全集上巻』に拠り、講演の展開に即して、初期の未発表歌群『詠草』から「寿梅田雲浜先生建碑」4首、「若狭八景を読める」8首、美文「青井山」、新体詩「青葉山」、「雪の日」(明41・4)18首、「日蔭草」(明41・5)14首、同時期の『雑詠帳』(大ノート)より8首(『全集』通し番号1094～1098、1119～1122)、「辞世、その他」2首(1191、1192)を用意した。更に『恋衣』(明38・1)の歌として「白百合」(登美子)13首、「みをつくし」(雅子)7首、「曙染」(晶子)10首、『山川登美子集』(昭4・12)から6首、それに鉄幹の歌集『紫』(明34・4)から11首、いずれも木俣修校訂・注釈『近代文学注釈体系 近代短歌』(有精堂 昭43・12)に収録されているものを、頭注付きで引用した。

与えられた演題に対して明確な結論は見い出せなかったが、事前提出の講演資料で、その方向性だけは示す必要があつた。そこで、先ず習作期の若狭・小浜を描いた作品を押さえる。鉄幹・晶子との出会いによる登美子の歌の深化、そして初期・中期の集大

成としての『恋衣』に触れる。しかし、登美子の歌は後期に更なる深化を遂げた。その時「ふるさと小浜」はどう歌われたのか、果たして初期・中期とは違った様相を見せていたのか、というものであつた。

(2)

「一始め―問題のありか」として、冒頭でこの講演の趣旨を話すために用意した資料は、『ふるさと文学館第二二巻 福井』(ぎょうせい 平5・8)の「作品解説」であつた。講演以前、私が登美子について書いた唯一のものである。

この全集は、「ふるさと」をキーワードとして、各都道府県別に全巻を構成。福井県は全五五巻中、第二二巻を占め、私が編集責任に当たつた。それぞれの土地に何らかの関連をもつ近代・現代の小説・詩・エッセイ・紀行を中心に作品を採録したもので、評論、俳句、短歌は原則として除かれた。各巻の構成に特色があり、個性的な作品群をエリア別またはテーマの関連性によって一括りとした。私の編集した巻は、「第一部青の村・潮の道」「第二部戦いの日々」「第三部なれば旅人」「第四部望郷と哀別」「第五部芸術と生涯」「第六部歴史の中の群像」、の各タイトルの下に作品を配置した。収録した作品中、若狭・小浜関連は、山本和夫の「青の村」「故里にて」、小畑昭八郎の「潮の道」、森崎和江の「海さち山さち 若狭小浜」、水上勉の『母一夜』『燈明』、田中光子の「足」、

杉原丈夫の『紅い花』であった。

第一部のタイトルを「青の村・潮の道」と名付けたが、山本和夫の「青の村」、小畑昭八郎の「潮の道」から採った。私は第一部の「作品解説」を次のように書き出した。

平成三年十一月、小浜市で「伝説が生きる、ひと、まち、未来」をメインテーマに、「八百比丘尼サミット」が開かれた。この若狭小浜の「八百比丘尼伝説」とは、むかし、若狭の国の長者の娘が、人魚の肉を食べたところ、八百歳の長寿を得、人々を助けながら諸国を旅したというもので、小浜ばかりでなく、全国各地に分布している伝説である。そこで、この伝説に由縁のある市町村との交流を図り、お互いの地域の活性化に結びつけようというものであった。

森崎和江の「海さち山さち」は、この八百比丘尼伝説の故地を日本海の南から北へと訪ね歩き、海辺に生きる人々が抱く神話と歴史の交流を追い求めたものである。山本和夫は「青の村」で、「この村は、／私に／星に乗って青い天空を旅することを教えてくれました。／ひとりで喋ることを教えてくれました。」と、故郷田遠敷郡松永村門前と己の文学世界の有機性を美しく歌った。現在、小浜・門前の古刹明通寺に山本和夫の「青の村」の詩碑がある。門前のさらに奥に生まれた小畑昭八郎は、故郷の山々の鎮魂歌を歌ったが、次第に若狭の「語り部」としての己の立脚点を明確に

していった。若狭に原子力発電所が林立する現実を前にして、果敢にも新「八百比丘尼伝説」で対抗しようとしたのが、「潮の道」である。

小浜市の近隣、旧大飯郡本郷村字岡田に生まれた水上勉には、「ふるさと」を舞台にした数多くの作品がある。この巻には収録でなかつたが、『若狭幻想』（昭57・8）では、岡田部落の象徴として「甚五郎石」を挙げ、「おんどろどん」「爺取る婆取る」「桑子」など、今では幻想と化した「生れ出たところのけしき」を語った。

「第五部芸術と生涯」は、当初山川登美子を中心に構成したが、編集方針上、短歌の採録は出来なかつた。そこで登美子の伝記と短歌を小説化した杉原丈夫の『紅い花』と、登美子の生涯をその足の冷たさに象徴し、そこに北陸の女たちの生を重ねた、田中光子の「足」を冒頭に配置した。続いて福井県在住の作家たちの作品を添え、若くして逝った塚原介山の評伝を最後に置いた。これらの作品の問題性を指摘し、併せて山川登美子の研究史を概括したのが、私の「作品解説」であった。私の登美子理解の根幹をなすものなので、些か長いが引用する。

「髪ながき少女と生れ白百合に額は伏せつつ君をこそ思へ」という歌は、山川登美子の代表的な一首とされ、白百合の登美子と呼ばれた。鉄幹と晶子と登美子、この三者の運命的な出会い。「それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ」と、親の決めた結婚のため、師友に別れて故郷小浜に帰る登美子。一

方、妻子ある鉄幹との恋を实らせ、詩歌史に燦然と輝く晶子。従来、登美子は悲恋の人として晶子の脇役に据えられ、歌人としての評価も低かった。

例えば、佐藤春夫の『晶子曼陀羅』(昭29)では、「佳人薄命」の章で登美子の一生を概括し、「夕雲男」で鉄幹と登美子の情交に書き及んでいる。吉屋信子の『若狭の登美子』(昭39)は、情交説を否定し、「歌も恋もいっしょくたになった明星調浪漫派の陶醉感情」と捉え、「登美子は友に恋をゆずったあわれにゆかしいひとと後世まで伝えられる運命がふさわしかった」と結論づけた。和田芳恵の『小説みだれ髪』(昭42)は、「登美子が今さら、竟にいらぬいちよつかいを出すのは、成熟した未亡人の、いたずら心にすぎないやうな…」といった類いの記述が散見し、調子が低い。あくまで晶子に即しながら、登美子にも深い理解を示したのが、田辺聖子の『千すじの黒髪』(昭47)である。「彼女の歌は、あるいは晶子よりもふかくものすさまじい執念の力にみちている」、「晶子と同等か、もしくは一級上に据えてもしかるべき歌人」、とまで登美子の歌を愛した。さらに、登美子の歌を、とくに夫駐七郎への挽歌、父山川貞蔵への挽歌、そして自分自身への挽歌、この三筋の挽歌にその特性を見出し、歌人登美子の復権を図った竹西寛子『山川登美子』(昭60)が出現するまでになった。

このような登美子評価の動きに力があつたのは、坂本政親編著『山川登美子全集』上下巻(昭47〜48)の刊行である。坂本は、登美子の実弟亮蔵が、一九六一年に福井大学に寄贈した登美子の遺

稿および関係資料を整理、翻字して、まず『山川登美子集』を世に問うた。これが後に全面的に増補、改訂されて先の上下二巻となった。この間、杉原丈夫も寄贈された遺稿により、坂本に先立って『紅い花』を書き上げ、やや遅れて『山川登美子遺稿』を刊行した。翻字をめぐる両者の理解が分かれたこともあつたが、この遺稿や関連資料の刊行が登美子理解を深めていったのである。

(中略)

明治三十三年十一月、鉄幹は晶子、登美子を誘い、京都粟田山麓の宿に泊まった。田中光子の『足』は、その時同衾した晶子を驚かせた登美子の足の冷たさを核にして、暗鬱な気候の下、忍従を強いられた無数の北陸の女たちの秘かな生命とエロスをうたつたものである。

私の登美子理解は、講演依頼時点ではこの程度でしかなかった。研究史の把握に間違いはないだろうが、何よりも具体的な短歌の鑑賞が不足していたのである。

しかし、全集『ふるさと文学館』の編集方針、そして責任編集者としての私の作品選択とその「作品解説」は、偶然ながら今回の「郷土学習講座」の趣旨に合致していた。そこで「山川登美子ふるさと小浜と歌の世界」の課題を負った私は、当初は「八百比丘尼伝説」、「青の村・潮の道」、「母一夜」『若狭幻想』などに表れた若狭・小浜と登美子のそれとを対置し、出来れば田中光子の「足」の世界、即ち北陸の女たちの生命とエロスとして拡大、抽象

化出来ないものか、と楽観的に考えて『山川登美子全集』を繙いたのである。

(3)

「登美子の歌の世界」と「ふるさと小浜」との関連が見えない中、講演資料送付の期日を迎えた私は、前述のような構成の下に、なんとか登美子の歌などを選択して資料を作り上げた。

登美子の歌の評価については、やはり竹西寛子氏の『山川登美子』（講談社 昭60・10）に影響を受けていた。また津村節子氏の『百合の崖』（新潮社 昭58・5）も面白く読んだ。そこで鉄幹との出会いと別れ、『明星』誌上での作歌活動、『恋衣』の特色などを押さえた上で、登美子の短歌の神髄は最晩年にあるとし、その質的深化を前期と比較すること、その対象として「ふるさと小浜」の歌を考えてみようというのが、あの講演資料作成の目論見であった。後は選択した「ふるさと小浜」の歌をいかに積極的に評価できるか、だ。

私に残された時間は、年末・年始の十日間。一月六日の講演に向けて、それこそ益も正月もなく机に向かった。が、依然として積極的に評価すべき「ふるさと小浜」の歌の方向性は見出せなかった。

講演原稿が出来ぬまま前日を迎えた私は、仕方なく、既に提出した資料を使いながら「山川登美子 ふるさと小浜と歌の世界」

を、搦め手から語ろう、と決心した。即ち、二ヶ月余りの私の試行錯誤を語ることに、である。山川登美子の歌の世界を「ふるさと小浜」と関連づけようとして、出来なかったこと、登美子に若狭・小浜を具象的に、写実的に歌った歌などなかったこと、などを話そうとしたのである。原稿を用意しないで、配布する資料を基に否定的な言辭を連ねること、いわば口から出任せでいこう、と高を括った。

六日の朝八時、車で小浜に向かった。午後一時半の開演の前に、登美子の歌碑（いく尋のなみは…）と小浜城址を見るためである。

当日は知らなかったが、翌日の『福井新聞』に拠ると、この日午前八時、小浜市伏原の曹洞宗・発心寺から寒修行の托鉢僧が町に出た。「一段と冷え込む古い町並みにこだまする声と鈴の音、風ではらむ黒染めの衣、雲水が吐く白い息と、その光景は情緒たっぷり」とある。情緒たっぷりなのは、記者の過度の脚色の方である。掲載されたカラー写真は、雪のない山門を出る雲水の穏やかそうな行列姿、背景の木々も緑で、記事の脚色を裏切っている。福井県のこの冬は異常に暖かかった。前日、福井市は久し振りに雨が降り、風も強かったが、雪は平地には全くなかった。十時過ぎに小浜に着いたが、雨空は少々残っていたが、やはり暖かかった。

発心寺は、登美子、父貞蔵が眠る寺である。私はこれまで発心寺を訪れたことはなかった。小浜は二度訪れていた。一度目は、小浜・和久里出身の学生の誘いで、西方寺の壬生狂言を見学した。

当日のパンフレットで確認すると、平成二年四月十五日のこと。狂言の番組は、和久里部落が伝えている「寺大黒」「とろろ滑り」など九番、であった。二度目は四、五年前、純然たる観光客として小浜公園、三丁町、神宮寺、明通寺、鵜の瀬、などを車で巡った。この時、梅田雲濱顕彰碑、山川登美子歌碑（幾ひろの浪は…）、佐久間挺長像なども訪れている。今回の講演前の匆々たる再訪は、講演内容、資料に関連して気になる点があったからである。

一月六日、雪のない、しかし前日の雨で足許が不安定な小浜公園を訪れた。「梅田雲濱先生之碑」は、ヨモギなどの立ち枯れた中に、いかにも荒れて立っていた。せめて旧天長節には掃除されるのであろうか。明治三十年事蹟保存会建立、「陸軍大将勲一等侯爵山縣有朋書」によるもので、裏面の銘は、文は行方正言撰、書は巖谷一六の手になる、という^{註②}。

登美子の歌碑の歌は、土田若洲の揮毫による、「いく尋のなみ盤ほをこす／くも耳恵三／北國人とう多八連尔／希里 登美子」、である。やや楕円の硯の内面に彫られている、といった意匠。草書体、変体仮名（漢字）混じりで、判読しがたい。印刷の関係上、刻字そのままの形では再現できないので、現行の仮名にはない変体仮名（漢字）の楷書体をも交えて翻字してみた。歌の表記自体、素人には判読しがたいことを示したかったからである。

別に「閨秀歌人山川登美子」として、「若洲小濱尔生れ后日本／女子大学に学ぶ名歌／多く若狭の登美子／と志て知らる茲二女史が／古里の昔を志乃ひて／よめる歌越録して／歌碑とな須／昭和

廿五年（一九五〇）／十二月之建／土田若洲」、との「略歴・建碑趣意書」的なものが嵌め込まれている。この登美子の歌を選択、揮毫した土田若洲、土田数雄は、登美子の三姉みちの夫、武久寅次郎の従弟であり、登美子より三歳下の甥収蔵（長兄久太郎の長男）の学友であった^{註③}。海軍大佐などを歴任後、昭和十年七月から二年間、小浜町議会議長、同十二年七月から十四年二月まで小浜町長などを勤めた人物である^{註④}。

「梅田雲濱先生之碑」は青井山を後背にして建つが、その左手の山道を登った中途の路傍の大岩に、登美子の歌と略歴の二面が嵌め込まれている。更に急な山道を登ると、平坦な広場に出る。小浜湾と市街を見下ろす形で、その広場のある大岩の上に立つのが、佐久間挺長の像である。青井山中腹に、最初の佐久間挺長の銅像が除幕されたのは、大正三年八月。同時に小浜公園の開園式も挙行された。昭和十九年一月、大東亜戦争遂行のため、全国各地で強行された金属特別回収のために供出され、台座のみが残った^{註⑤}。昭和三十四年四月、時の小浜市長を長とする「佐久間挺長再建委員会」により、銅像は再建された。当日私が岩に登って確認したところ、再建像の台座には「一九五八・七福井大学笠原行雄作」、と刻印されていた。

後の論の展開のために追記するならば、昭和五年六月、小浜出身の金物商の拠金により、「梅田雲濱先生之碑」の左側に銅製の座像が建立された。コンクリートの台座には、「妻臥病床児叫飢挺身直当戎夷今朝死別与生別唯有皇天后土知」、の漢詩を刻した銅板を嵌

め込んだ。だが、佐久間挺長像と同じくこの銅像も、戦時中供出されて今はない。昭和十二年十二月、時の小浜町長土田数雄は、「梅田雲浜先生遺徳顕彰会」を組織し、国民精神高揚のため、愛知県常滑の陶工に依頼し、雲浜の姪、山田登美子が描いた肖像画を基にして制作した陶像を、広く頒布した。昭和十八年十一月、小浜公園内に雲浜の歌碑「君が代を思ふ心の一筋にわが身ありとも思はさりけり」、が作られた。戦後は、小浜市大手通り、児童公園内に立つ雨田光平作の雲浜像が最も早く、昭和四十年九月に建立された。

小浜公園内にある三つの碑や像を確認した後、小浜城跡に向かった。詳細な地図を用意していなかったのが災いして、御食國若狭おばま食文化館に行ったり、雲浜中学校に突っ込んだり、阿納まで行って引き返したり、迷いに迷って小浜城址に辿り着いた。城壁に接して路上駐車をしたが、勝手も分からないまま、駐車付近の城壁に刻まれていた石段を登り、城壁上を一周した。驚いたことに、城壁からすぐ手が届く処に人家が建っている。城壁上の一部は畑になっていた。目指すは天守閣跡。本丸跡北端にあった。案内板によると、明治四年十一月、大阪鎮台の第一分営を設置すべく改造工事中、二の丸櫓の工事場から失火し、城の大部分を消失した、と。明治八年、城域に小浜神社が創建された。

天守閣跡に立って小浜湾を眺めた。雨が残り曇天ではあったが、白波もなく穏やかな冬の海であった。余りにも穏やかすぎる冬の海である。温暖化なのか、日本中、どの地域も冬の景色が変化し

ているようだ。だが、若狭の登美子、北国人の登美子、その冬の歌の情景を余りに裏切る穏やかさだ。北海道生まれで、三十台半ばまでそこに暮らしていた私は、福井に赴任以来、北陸の雪は大根おろしのような、と思っている。今回、登美子が北国人であることに違和感を持ったこの北国とは、京都・大阪、(或いは東京)に対する地理的なものであり、何よりも登美子の文化的、歴史的な心性から生み出されたものであるう、と頭では理解している。北海道に暮らすある年代以上の者は、本州を「内地」と言うが、歴史的に「外地」人・北海道生まれの私には、「内地」人・登美子の「北国人」なる言葉使いが気に障るのである。

天守跡に立ち、これは北国の景色ではない、と改めて思った。大島半島と内外海半島に抱かれた小浜湾、小浜市街。この私の立つ天守閣跡から、外洋は全く見えない。山々に囲まれた大きな湖、といった感じだ。山中にあるカルデラ湖のような切り立った山肌ではなく、山容は大きく、重畳と丸みを帯びて重なるが、威圧感はない。荒涼感は微塵もない。これこそが小浜の風景の典型なのではあるまいか、と思った。ならば、登美子の歌には、やはり若狭の自然はないな、と思った。当初から抱いていた疑念は強められ、午後の講演の課題は、ますます私には重いものとなった。ここに至った以上、課題の結論が出なかったこと、登美子の若狭が見つからなかったこと、登美子独自の自然観はなかったことなど、私のここ二ヶ月間の試行錯誤を正直に話すしかない、と改めて思った。そして、午後の講演は、大変恥ずかしい結果に終わった。

その顛末は次節に書くことにして、小浜城跡について附記したいことがある。私が恥ずかしい講演をした二日後、平成19年1月8日付の『福井新聞』「こだま」欄に、宮城県の70歳男性の、次のような投稿が載った。

城跡めぐりが好きな私にとって、初めて訪ねた小浜市での目当ては、もちろん小浜城跡だった。市内に入るとすぐ、まっすぐ小浜城跡に出かけた。意外なほど小ぶりの城跡だが、石垣はしっかりとっている。／石垣伝いに裏側にまわると「あれれ」と驚いた。お堀の跡がそれらしく残っているが、その大半が人家で埋まっている。それも割と新しい建物であることから、そう古くない時期の建築であると想像がつく。／城の遺構は、天守閣や門などの建物が重視されがちだが、それ以上に石垣と堀が大事である。美観上もこの二つが無視できないことは、容易に理解されると思う。小浜の場合、石垣はしっかりしているのに、内堀がこれでは……と思われる。／どうしてこんなことになったのか。一旅行者には理解できない事情があるのだろうか。天守閣再建の計画もあるようだが、天守閣の目の前に人家が立ちふさがっているようでは形無しだ。天守閣再現再建よりも、内堀再現のほうがはるかに大きなことを、ぜひ知ってほしい。

小浜城は、北川、南川の流れを自然の堀とした水城であったが、明治維新以降、城主酒井家が東京に移住、さらに小浜の近代化、

都市化の中で、防災の上からも城域の埋め立ては必死であったろう。しかし、現状の小浜城周辺は余りにも文化的に貧困である。「御食國若狭おばま」を標榜する小浜市にとって、小浜城址では食材にならないのであろう。

(4)

午後一時半からの講演は、先にも述べたような目論見通りで進んだはずだ。資料を基にしてではあったが、原稿もなく口から出任せでやったので、今の私には正確に再現する術がない。うろ覚えだが、例えば次のような趣旨で話したはずだ。

明治三十年十二月頃に詠んだと推定される「寿梅田雲浜先生建碑」4首は、登美子がこの碑の開幕式に参列したとは思えないが、いかにも建碑の趣旨に合った歌になっている。その歌の趣旨は、美文「青井山」にもびつたりと重なる。これらから登美子は維新の梅田雲浜に限りない同情を寄せていた、登美子自身も志士の気概に満ちていた、それは父貞蔵の武士的気質を受け継いだものであった、と結論づけることが出来るかも知れない。

しかし、幕末時の小浜藩・酒井家は徳川幕府方であり、尊皇攘夷の雲浜を逮捕したのは、時の京都所司代を勤めていた酒井忠義であった^註。登美子の父、貞蔵は酒井家の重臣である。維新後も、東京に移った酒井家の家扶を勤めている。酒井家、及び貞蔵が、この雲浜の顕彰、神格化を手放しで喜んでいたとは思えない。登

美子の和歌上の雲浜礼讃と、父貞蔵の思惑（これは仮説でしかないが）とを、どう調整すればいいのか。全体、資料としても示したが、最晩年に「191」とへ身は後瀬の山にくつるとも何忘るべき酒井家の恩」との歌がある。登美子の最後の歌は、死亡二日前の「192父君に召されていなむとこしへの春あた、かき蓬菜のしま」である。この二首からも、登美子は父貞蔵、及び酒井家の膝下から最後まで抜け出す事は出来なかった、と結論づけることも出来る。

この見解に立てば、雲浜建碑の4首は、時事的、社会的な詠題であっても、当局の思惑通りの、要請された内容でしかないことになる。それも旧来の陳腐な技巧が露わな歌として。登美子の社会性、問題意識性を考える場合、格好の事例として所謂「恋衣事件」がある。「以下拾式首さることのありける時」の詞書きのある120〜131の歌をどう評価すべきか。これらを含めて改めて、登美子の歌の時事性、社会性を考える必要がある。

叙景歌的な歌をどう評価すべきか、これも問題である。登美子自身は、自分の和歌を明治文壇革新新期の中でどう位置づけていたのであるうか。近代和歌史の中で、与謝野鉄幹の占める位置は大きいとして、一方に正岡子規がいる。鉄幹にも「万葉集」時代があった。登美子は、正岡子規の「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候^{（註）}」、との言辭は読んだであろうか。

『明星』といえ、直ぐに与謝野晶子の短歌が想像されるが、出発時は鉄幹が主筆（社幹）で、林滝野が発行人兼編輯人であっ

た。「東京新詩社清規」に「本社は専門詩人以外に和歌及び新体詩を研究する団体也」とあるように、短歌専門の投稿雑誌ではない。

第一号（明33・4）に、島崎藤村のあの著名な「小諸なる古城のほとり／雲白く遊子悲しむ」の「旅情」が載るが、詩が中核でもない。「先輩名家の芸術に関する、評論、論説、講話、創作、（和歌、新体詩、美文、小説、俳句、絵画等）批評、随筆等を掲げ、傍ら社友の作物と、文壇（特に和歌壇新体詩壇に重きを置く）の報道とを載す」とある。即ち、既成の作家からのあらゆるジャンルの原稿と、社友の短歌、新体詩の投稿からなっていた。社友といっても、社費（会費）を払えば誰でも社友になれたのである。しかも最初は、中学教育に資するために「教育に関する先輩の論説講話等を掲載し、併せて中学生諸君の、文章、和歌、新体詩、俳句、絵画、筆蹟等の投稿を選抜して掲載」する方針であった。登美子の『明星』に載った最初の歌は二号（明33・5）の「132鳥籠をしづ枝にかけて…」であるが、これは活字ポイントを落として「中学時代」欄に掲載された。掲載の規定通りならば、登美子の「女学生」意識によって投稿された歌ということになる。この「中学時代」欄は、第三号から廃止されたが、総合雑誌的性格は、第六号（明33・9）の四六倍版、編輯発行人与謝野寛、になっても変わらなかった。

登美子の生前未発表の『詠草』は、『古今和歌集』の仮名序をもじった「はしがき」を持ち、「明治廿とせあまり七とせの春若艸のもえいずる頃より」、と作歌開始時期の情報がある。『新声』に投

稿採択された歌10首(明30・12・32・4)、『文庫』の2首(明31・4、6)をも含んでおり、作歌時期の幅をある程度限定できる。投稿歌の採用年次から推定すると、歌は厳密には執筆順に並んではいないが、明治二十七年春から三十二年にかけて大きく前後に流れている、と言えるのではないかと。「若狭八景を読める」は明治三十一年四、五月頃の作歌であろうか。これを初期の「ふるさと小浜」の歌とした場合、何か特徴があるのだろうか。

赤見貞の「雲浜八景考」に拠ると、中国湖南省洞庭湖畔を中心とする瀟湘八景になぞらえ、室町時代には京都に近い近江琵琶湖に近江八景が歌われた。若狭八景も、江戸寛政時代、小浜藩主酒井忠勝の時にはできており、近江八景と全く同じく、秋月、晴風、夕照、帰帆、晚鐘、夜雨、落雁、暮雪の景勝を詠んでいる。忠勝の時代、寛永十三年、小浜城の天守閣が築造された。その後多くの若狭八景・雲浜八景が詠まれていくが、その間、八景材、及び景勝地の採択に移動がある。元禄末、桑村丈之進著『若州雲浜八景』の、後瀬春望、青井晚鐘、津田落雁、両兒帰帆、雲浜秋月、蒼島漁火、久須夜囊、多田晴雪、が広く流布し明治期にも伝わった。

登美子の「若狭八景」は、板橋秋月、多太晴嵐、後瀬夕照、と少々それとの異同はあるが、伝統的な八景とその歌材の選択に大差はないと見ていい。伝統的な景勝地、歌材、との見地からいえば、「ふるさと小浜」のテーマに適った歌群である。しかし赤見貞は細かい分析をすることもなく「登美子らしくない旧派のもので

ある」と断じた。この期の登美子は旧派の歌人として、和歌の初心者として、文学的には無視していいのであろう。

若狭図書館学習センターでの講演の顛末に戻る。『詠草』所収の和歌群は旧派のもので、さほど価値のないものとして詳しく解釈しなかった。晩期のものでして用意した「雪の日」「日蔭草」「雑詠帳」(大ノート)のそれぞれ数首を、原稿もなしに思いつくままに批評していった。うる覚えだが、例えば次のような趣旨であったはずだ。

「1120村ぎえのゆきにはもなきはまなすび小浜はさびし雁もなき、ぬ」の歌に対して。「村ぎえのゆき」とは、村々が埋もれてしまふような大雪、の意であろうか。「はまなすび」は浜茄子。それは夏の季語ではあるが、葉は落ち実だけをまだ残した浜茄子が雪の中に埋もれている海辺の情景を想像すればいいのだろうか。だが一般的に冬の海辺は風が強く、浜茄子が雪に埋もれている情景は想像しがたい。全体、歌自体に「はまなすび」がどうなったという情報はない。『雑詠帳』の校訂者の坂本氏が「村」に「ママ」を付しているのも「村ぎえのゆき」では、以下の歌材と齟齬を生じ兼ねない、と危惧したからではないか。「小浜はさびし」の一要素が「雁もなき、ぬ」だとしたら、この秋の季語・景物としての雁と、「村ぎえのゆき」との重なりをどう解釈すればいいのだろうか。結局この歌は、詠まれている季節が揺れていて、景物に対する焦点化も不十分である、と断ぜざるを得ないのである。

「1121天守かく尋つむ雪のしろあとに夕ばへてりぬしらさぎのむれ」の歌は、以下のように批評したようだ。何メートルも雪が降り積った天守閣、その雪に埋もれた城跡に夕陽が映え、白鷺が飛び交っている。小浜城での実景のようだが、絵のように美しく、或いは詠題によって作られた想像歌、言葉遊びかもしれない、と。

結局、「ふるさと小浜」を詠んだ晩期の登美子の歌は、前期とさほど変わらず概念的、題詠的である、登美子は終生、写生的な歌や自然主義的な歌は歌わなかった、歌えなかったのではないかとした。ただ「父君の喪にこもりて」の詞書のある「雪の日」は、実際の父の死が一月であったゆえか、季節・冬・雪、などと、登美子の哀惜の念・絶望の心がそれなりに解け合った歌になっている、と補足した。いずれにしても「ふるさと小浜」を積極的、肯定的に詠んだ歌は見出し得なかった、との趣旨で講演を結んだはずである。

講演後、質問の時間があった。一つ目は、若狭の自然を詠んだ登美子の作品として、新体詩「青葉山」が相応しいのではないかと、というもの。これに対し私は、青葉山は確かに若狭富士とも呼ばれ、若狭を代表する山ではあるが、高浜町と京都舞鶴市の境に位置し、登美子が日常的に望んでいた山ではない、「若狭百景」的な歌材としての意味はあっても、狭義の「ふるさと小浜」の詩としては採るべきではない、と答えた。

二つ目は、1121の歌の「天守かく」は、「天守閣」ではなく「天守

欠く」と解すべきではないか、というものであった。全くその通りである。私自身、坂本政親氏の「秀歌鑑賞」(『山川登美子全集 下巻』所収)を読んでおり、何よりも午前中、小浜城跡に立ち、明治四年に天守閣が焼失した、という案内板を読んでいたはずである。全体指摘されるまで、自分が「天守閣」として歌を解釈していたことなど思いも寄らなかった。登美子の「ふるさと小浜」の歌を評価しない私の論調での、無意識の勇み足であった。勉強不足による下原稿なし、ぶつつけ本番、言いつ放しが招いた錯誤であった。この誤読で今回の講演は無に帰した、と赤面して小浜を後にした。

(5)

1121の歌で口走った解釈は明らかな錯誤であったが、講演の趣旨は妥当であった、と今でも思っている。しかし恥を雪ぐには、改めて登美子の歌を勉強し直すしかあるまい。

「ふるさと小浜」と言えば、登美子の文学碑からのアプローチがあるだろう。

小浜公園には、昭和二十五年十二月に建立された、土田数雄選定・揮毫の「いく尋の…」の歌碑がある。橋本威氏は、建碑当時から今日まで余り評判の良くない、というこの歌碑の来歴を様々な角度から検討し、土田数雄は「敬愛する佐久間挺長顕彰の効果をもこの歌碑の設置で目論んでいた」と結論づけた^{註10}。講演前、この

論文を読んでいた私は、多くの未知の情報を得たが、この結論部分は違う、と思った。直感に過ぎない。反論は実証的になければならない。要はこの歌をなぜ土田数雄が選んだか、だ。建碑の趣意書に拠れば、「若狭の登美子」の「古里の昔を志乃ひてよめる歌」、だったからだ。この歌は明治三十八年七月、日本女子大の夏期休暇で、登美子が小浜に帰省の途次作られたものだ。

新しい歌碑は平成十二年四月、小浜公園の正面入り口近くに建てられた。千葉半厩書による「髪ながき少女と生まれしる百合に額は伏せつ、君をこそ思へ」、である。「恋衣」「白百合」の冒頭歌で、「若狭を謳う」実行委員会」の選歌である。

私は当初、この歌碑のある場所は知らなかった。講演直前、小浜公園を訪れたのにこの碑の前を素通りしていた。この新歌碑の存在自体は知っていた。『図録山川登美子 その生涯・こころの歌』に拠ってである。この図録は、編集に係わった一人、書道教諭の岸本三次氏から頂いていた。講演終了後、新歌碑の場所をセンター長に尋ねた。併せて未見の山川家の場所も尋ねた。両方の住宅地図のコピーを頂いた。山川家の方は、敷地の中に山川重克とあった。

春休み、この二カ所と、これも未訪の発心寺を訪ねた。山川家は公開していると聞いていたが、平日ゆえか閉まっていた。住宅地図の正方形とは違い、敷地は長方形で、庭は想像していたよりは狭かった。この真相は後で知ることになる。発心寺は場所自体迷ったが、登美子の墓も分からなかった。暫くして来合わせたお

寺さんに、わざわざ案内して頂いた。小高い山裾の一番奥にあった。登美子、父貞蔵の他、山川家十代登(登美子の長兄久太郎の三男)の墓もあった。山川重克は十一代、恵美はその妻である。

話は先に進む。平成十九年四月二十一日、登美子の生家(正しくは貞蔵が明治三十九年に新築した、登美子の終焉の家)が「山川登美子記念館」として開館した。前年二月小浜市は、山川恵美氏から生家と調度品八百余点の寄贈を受け、同四、五月、県立若狭歴史民族資料館で、テーマ展を開いた。併せて生家を公開すべく、改修工事を進めていた。

記念式典の当日、私は六時半に家を出、電車を乗り継ぎ九時過ぎに小浜に着いた。式典まで時間があるので、駅前で自転車を借り、先ず空印寺の八百比丘尼入定洞を見学。続いて海に向かい、人魚の浜のテトラポットに降り、早い食事をしていたら、突如何ものかに襲われた。鳶が私の手にするお握りを狙って背後から急降下して来たのである。春風駘蕩の気はすっかり失せて海を離れ、鯖街道資料館をざっと見てから中央児童公園に着き、雨田光平作の梅田雲浜像前でしばし時を過ごした。そして「山川登美子記念館」に向かった。

正面座敷前、緋毛氈の低い台に対して、横長に椅子が並べられ既に多くの参列者が腰を下ろしていた。部外者の私は、気後れしたが一回りして裏手(こちらが正門か)から中に入り込み、遠くから式典を拝見した。 Tee プカットは、緋毛氈に立った村上小浜市長、県会議員氏、和服姿の女性(後で山川恵美氏と知れた)、派

手な青シャツ、ネクタイ姿の中央官僚(?)氏。村上市長の挨拶は、登美子は与謝野鉄幹・晶子とともに『明星』を創刊し、と間違った部分はあったが、死因を呼吸器疾患とするなど配慮した表現もあり、郷土の偉大な歌人の記念館を町作りの拠点としたい、との行政側の意図が溢れていた。短歌結社「白珠」を主催し、山川登美子を顕彰する市民グループ「登美子倶楽部しろゆりの会」の会長も勤める安田純生氏の挨拶もあった。

前日の『福井新聞』はこの「しろゆりの会」のことを報じていた。同会は「『若狭を謳う』実行委員会」の後身で、四年前に設立された。登美子の歌の素晴らしさを伝えようと解説本の出版を企画し、それが安田純生(監修)『夭折の歌人 山川登美子の世界』(青磁社 平19・4)として刊行された。秀句百一句の解説は、今野寿美さんら著名な歌人の手になる、と。「発刊した本を手に喜ぶ『しろゆりの会』のメンバー」とのキャプション付きの写真を見てハッとされた。中の一人が私の誤読を指摘した方の方だったからだ。

この『山川登美子の世界』は、当日式典に参列した関係者に配られたらしい。参列者の中に、旧知の岸本三次氏がいた。岸本氏は端にいた私を憐れんのか、式典後、自らの封筒包の中からこの新刊本を出して私に下さった。

式典後、参列者は生家に入り、展示室などを参観し始めた。暫く躊躇していたが、受付の人に、この一月に図書学習センターで登美子に関して拙い講演をした者だが、改めて勉強したので拝

観させて欲しいと頼んだ。私もその講演を聞いてました、とその受付老嬢。ここにも私の恥の立会人がいた。「しろゆりの会」の人らしい。三百円の観覧券番号は「No.000002」。私より先に有料拝観者がいたのだ。どうせなら一番が欲しかった。私の内気が悔やまれる。

展示室に居合わせた岸本氏と、鉄幹の添削の朱筆が入った登美子の投稿原稿「雑詠十首の中に」の前で、暫し登美子談義。やがて岸本氏は、午後から「小浜市働く婦人の家」で開かれる「第十一回山川登美子記念短歌大会」の準備がある、と退出した。後日確認したところ、平成18年12月31日付の『福井新聞』は、来春の「山川登美子記念館」開館に合わせて開く短歌大会の作品募集を報じていた。短歌の申し込み先は「しろゆりの会」。どうやら岸本氏も「しろゆりの会」の回し者らしい。

登美子終焉の間に回った。もう参観者は誰もいなかった。弟亮蔵の手記にあった、兄銓次郎が登美子の遺品を燃やすべく投げつけた、との庭はいかにも狭いように思われた。廊下にいた市職員風の妙齢の女性にこの疑問をぶつけるところ、蔵などは壊し、敷地は元のままではない、と言う。また式典終了後、隣家との境の人造竹塀の一角の押戸を潜って行く着物姿の女性の後姿を不審に思ったので、それも尋ねると、山川恵美さんではないか、と言う。つまり、私が住宅地図で見た、大きな正方形の山川重克宅は、明治以来の住居部分は小浜市に寄贈され、残り半分(?)の敷地は山川恵美氏の新宅となっていた、という訳だ。新しい知見を得て、

「小浜市働く婦人の家」に自転車で向かった。

入口の受付で、会員ではなくちょっと参観したい、と断って上階に上がった。エレベーターを降りた処で、多分「しろゆりの会」の人たちであろう、店を開いていた。改めて『山川登美子の世界』を買い、会場の最後部に座った。暫くして岸本氏が、大飯町の画家、渡辺淳氏を紹介してくれた。渡辺淳氏は、水上勉の小説の表紙絵、挿絵で知られ、私も「若州一滴文庫」で氏の絵には接してはいたが、ご本人とは初対面であった。また、河野裕子、永田和宏両氏もご紹介頂いた。和歌を詠むような典雅の方とはこれまで接したことがなかったので、会話もしどろもどろ。今野寿美氏をちよつと拝見したくて、とお二人に誠に失礼なことなど言つて別れた。

当の今野寿美氏はやや遅れて来て選者席に座り、大会は開会。教育長の挨拶でも、登美子は呼吸器疾患で、と言つた。先の三氏を含む、十人余りの審査員が紹介された。その結社名やお名前は座席前のテーブルに張り出されていたが、その選者の軽重は私には分かりかねた。登美子の名前を冠した短歌会でどんな歌が選ばれるのか、選者の好みと講評とはどのようなものであるのか。外野的興味はあつたが、帰りの電車の時刻が迫つていたので、早々と退場して自転車を駅に走らせた。何かと勉強した一日であつた。

なおこの日、同じく恵美氏から寄贈された刀剣類を公開する「山川家の刀剣展―小浜藩土山川氏に伝えられた刀―」が、県立若狭歴史民俗資料館で始まつた。

(6)

登美子の文学碑から「ふるさと小浜」を考えたい、と言ひ出しながら、「越野の一日(4月21日)」みたいになつてしまった。が、私の真意はこうである。「若狭を謳う」実行委員会」などの働きで、町おこしに連結するような登美子の顕彰が新たに起こり、新歌碑の建設になつた。その動きの頂点として「山川登美子記念館」が開設された。国文学徒として慶賀に堪えない。が、この記念館の維持は人的にも経済的にも大変だろう、と。

土田数雄がいなければ、昭和二十五年時での旧歌碑の建設はなかつた、と私は思う。日本が経済的に厳しいあの時点で、公職を退いていた土田数雄がなぜ歌碑を建立したのか。戦前あれだけ顕彰された梅田雲浜や佐久間勉像の新造、或いは再建は、登美子の歌碑以後のことである。土田数雄が佐久間勉を心から人格化していたのなら、戦時中に供出された佐久間の銅像の再建を、戦後何より早くしたはずだ。旧台座があるからとて、その途中の山道に踏み台としての登美子の歌碑を建てた、とは、思い付きも甚だしい意見である。

土田の登美子歌碑の建立は、如何なる理由によるものか。土田自身がその端緒は語っているが、今の私にはその真偽を正確に明らかにできない。ただ、「いく尋の…」の歌は、「若狭の登美子」の「古里の昔を志乃ひてよめる歌」と土田が判断した結果である、

と私は素直に信じたい。土田は「郷土に建設する歌碑」としてこの歌を選んだ、と理解することから私の論は出発する。小浜の風土を詠んだ登美子の歌が幾つもある中、なぜ土田はこの「小ノト」の未発表歌を選んだのだろうか。

「『若狭を謳う』実行委員会」は、「髪ながき少女：」、即ち「百合」の巻頭歌を選び、新歌碑を小浜公園正面近くの平地に建立した。新歌碑の建立に当たり、実行委員会でのような議論があったのかは分からないが、登美子の再評価を勘案したもの、と推測される。

この歌の制作年代は不明で、「作風からみて、明治三十三年八月、大阪で晶子と共に鉄幹と相会してから間もない頃の作」とされるが、「歌集をまとめるに当たって新たに作られた一首だったという可能性」も指摘されている。いずれにしても「百合」期を象徴する一首、であるのは間違いない。晶子の歌のような奔放大胆な官能性はないが、「一種運命的な受け取り方にはじまるこの歌の素直な表現には、若き日の喜びに満ちた女性らしい自信と幸福感がつつましくも溢れているのであって」「作者らしい人柄がよく現れている」、というのである。

別な視点もある。「去年よりひとり地にいきながらへてよめる」との詞書きのある「夢うつつ」(明36・7) 10首は、9首まで「百合」の中心部に配された。この「百合」の歌の配列、構成員図を巡って様々な議論が展開されて来たが、未だ納得できる解析はない。ただ、「夢うつつ」以降に登美子の歌が深化したとし、

「父君の喪にこもりて」の詞書きのある「雪の日」や「日蔭草」の歌を重視する流れは確実にある。夫駐七郎への挽歌、父山川貞蔵への挽歌、そして自らへの挽歌、この三筋の挽歌に登美子の特質を見出した竹西寛子氏の『山川登美子』があったことは既に触れた通りである。

ならば「『若狭を謳う』実行委員会」は、なぜこの視点から新歌碑を選ばなかったのだろうか。「死の床の下から発見されたノートに書き記されている歌は、恋への、歌への、生への執着に悶え、刻々と迫って来る死の影に怯え、救いのない孤独に沈み込んでゆく登美子の赤裸々な胸中が吐露されていて壮絶である」(津村節子「若狭の登美子」)、そんな歌は、「ふるさと小浜」の顕彰に相応しくない、と判断したからであろう。呼吸器疾患、との配慮に通う心根であろう。肯定的な「ふるさと小浜」の歌は、晩期には見出し得なかったであろう。

歌碑として晩期の歌を採録しなかったのは、土田数雄も同じであった。土田は「若狭の登美子」「古里」に拘泥した結果、個人的な好みからの選歌をした。実行委員会は、晶子との対比から「作者らしい人柄がよく現れている」「美しく、かつ清純に歌い上げた作」、を選んだ。晩期の歌に表出されている、「ふるさと小浜」の実態・現実の露わな歌を避けたのは、両者とも同じである。個人であれ、行政絡みであれ、「ふるさと」の顕彰は難しい。まして周囲の白眼視の中、呼吸器疾患で亡くなった登美子の顕彰においては。

今春の「若狭図書学習センター」での講演の課題は、山川登美子を、「ふるさと小浜」とその「歌の世界」に関連付けて話す、というものであった。この演題は結局、登美子の歌の本質はなにか、どこにあるのか、ということと同じである。私はその解明に失敗した。恥は雪がねばならぬ。素人ながら再度、登美子の歌に挑戦する所以である。単に『恋衣』や『明星』掲載歌に止まらず、習作歌、未発表歌も含めた全歌の鑑賞を目指したい。正しく鑑賞するためには、何よりも先ず全歌の通釈が必要であろう。だが、現行の表現のままでは、直ぐには理解しがたい歌も多い。そこで、登美子の全歌の現代語訳を試みることにする。私自身、現代語に翻訳することでその意味を十全に理解し、鑑賞に繋げたいからである。

(7)

周知のように、登美子の優れた資質を指摘した一人に釈道空がいる。伝統的に盛んであった女流の歌が、なぜ今日衰退してしまったのか、その問題意識の下、登美子の和歌の特質を論じたものである。^{註1)}

増田雅子の『恋衣』『みをつくし』の冒頭歌「しら梅の…」は、「くらしつくであり、観念的な処が少い」。それに比して登美子の『白百合』の冒頭歌「髪ながき…」は、「語づかひに特別違ふところ」「技術」があり、「ぼうず」がある。この「ぼうず」こそ、「明

治以後の女歌の開拓して行つてよい暗示の、ひらめき」である。この暗示が悪く現れると、晶子の「乳房おさへ…」のような、「ぼうずばかり盛ん」な歌になるが、「女性の短歌の伝統には、どうしてもぼうずのある歌といふことが、許されてゐる」のである。「アララギ」以降、女歌が衰微したのは、写実主義、現実主義にかまけた結果である。女流は「現実離れの歌」、「現実力を発散する想像」歌を作るべきである。この「現実離れの歌」こそ、「ぼうずのある歌」なのである。

新詩社時代の女流たち、例えば登美子は「そは夢か…」「地にわが影…」など、「口から出まかせと見える歌」に長じていた。「自由」に語を流して、魂を捉へる」行き方である。古代の単純素朴な名歌も「まづ考へることの先に、作つてか、」り、「最後の一段に行つて、ふつと纏めあげる」行き方が多い。登美子の歌も「頭から技巧を重ねて行くといふ様な歌」ではなく、「かういふ事を詠まうとは思はずに、語を並べてゆき、そして最後に近づいて、急速に整頓せられる」、そんな歌なのである。

以上、釈道空の登美子理解、それを原文の前後を繋ぎ合わせて纏めてみた。この視点を、以下の『白百合』通釈の基本としたい。

即ち、登美子の歌を「現実離れの歌」とし、写実主義的、現実主義的、或いはモデル穿鑿的なアプローチからは、ひとまず距離を置くこと。あくまで「ぼうず」の歌、「こしらへもの」「観念」的な歌として、その構想、構図を考えること。言葉の並び、連結が「出まかせ調」で、「考へることの先に、作つてか、つてゐる」

ので、下の句、最後の一段での急速な整頓、纏め上げに注意して「魂を捉へる」ようにして現代語訳すること、などである。

これはあくまで私の心構えであって、実際は上の句と下の句の言葉の連結、意味の繋がりに苦慮する歌が多かった。登美子の作った「現実離れ」、観念、幻想の構図が辿れない場合もあった。先学の解釈も参照したが、逐語訳にしても意識にしても、出来るだけ簡潔な現代語訳を心掛け、六十字以内に収まることを自らに課した。

尚、以下の通し番号は『山川登美子全集上巻』に拠るが、原歌は明示せず、現代語訳のみにした。また『恋衣』二版、三版で若干の表現の修正を加えられた歌については、特に言及しなかった。初版の歌が削除され、新歌に振り替えられた場合は、初版の歌に引き続き、新歌の現代語訳を載せた。新歌の番号も『山川登美子全集上巻』の番号に拠った。

- 1 黒髪の長く豊かな少女と生まれた私は、今香り漂う白百合に面を伏せながら貴方のことを想っています。
- 2 神聖な祭壇の、あのうら若き捧げ者をご覧下さい。にえが栄えるように、しばし燭台の明かりを百にも増しましょう。
- 3 それは夢ではなく、私の抱いた幻想です。目を閉じると見えてくる幻影の美しい色の霧に、私は捲かれてしまったのです。
- 4 貴方に対する私のこの想いはこれからどうなるのでしょうか。貴方から頂いた草花もいまは蕾のままです。

5 射当てられるはずだ。たとえ失敗しても私は、金の桂を額に捲ける貴方に向けて矢を放とう。

6 大木になったら琴を作りましょう、と二人で植えた桐の木。その落葉に、決して恋はすまい、と貴女はお書きになるのですか。

7 金色の雲よ。私たち二人だけを雲の中に籠めて巻いてください。二人の中を隔てることなど、神様も決して許しはしないでしょう。

308 貴方のもとに降りて来た高貴な天使の姿に感激する余り、私はその翼に似た袖を振って迎えたのです。

8 手も触れないのに琴柱が倒れて、何かを恨むような音をたてた。その音を響かせるように秋の夕風が吹きわたる。

9 何という地名か、それは知らないけれど、貴方にきつと出会えると思うと、この道がとても愛しいものに思われてくる。

10 この胸の中の悶えを夕方の荒海の潮に向かって吐き出し、そのまま帰らないつもりです。

11 この塚に葬られている人のことは名前すらも尋ねないでください。哀れと思うのなら、ただ一群のスマレを植えてください。

12 毎朝紅の花を摘んでも尽きはしない。その紅の花を摘みながら、尽きない貴方への想いを頼みにして、私は生きていきますように。

13 七尺にも余る私の黒髪が秋になって抜け落ちた。その髪を千金のお金を出して買ってくださる王様がぜひ欲しいものです。

14 私の吐く息を芙蓉の風のようにだ、と仰しゃいますな。私の息は、あの十三絃をも一息に切ってしまうほどの強いものなのです。

15 もしも生まれ変わることが出来るのなら、魔神が右手に持つと

- いう鞭を奪い取り、美しい恋の数々を全て打ち壊してしまいたい。
- 16 貴方、袖をたてて私を庇おうとなさいますな、世間から理不尽な指弾を受けるでしょう。私は運命を受け入れるばかりです。
- 17 運命のままに私は空しく消えていくのでしょうか。悶えに悶えた私の歌がどんな悲痛なものであるのか、せめてお聞きください。
- 18 忘れはしません。貴方も私をお忘れにならないでしょう。そうは言っても、相変わらず寂しい道に行くのが私の定めなのです。
- 19 私のせいで貴方をお泣かせ致しました、お許しください。申訳なさで一杯の心弱い乙女に、いま涼しい秋の風が吹いています。
- 20 私は乱れに乱れた心のために針を当てて縫うこともできず、ただ白いままの生地を被って泣いているばかりでした。
- 21 私は狂ってしまいそうだ。どんなに世を恨めしく呪わしく思っていることか。しかし黒髪を解き、逆風に向かって歩いていこう。
- 22 私の足許が朧気になって消えた。いつしか天上界に芳香を漂わせるという百合の蕊の真ん中に立っている私を発見したのです。
- 23 私たち二人の旅は麗しい神々の船出そのものだ、とお答えして艦綱を解きましょう。後は浪に任せてどこへでも漂うばかりです。
- 24 京都の秋のある日のこと。黄色い女郎花と白い男郎花が無惨にも打ち萎れ、恨み言を言い合っていると、私には見えたのでした。
- 25 匂いが外に洩れ、人々から何かと咎められるのが煩わしいので、私は百合を袖で覆い隠して抱くのでした。
- 26 お別れします。水室で咲いてる花のように、秘かに貴方を慕っている私の恋は美しいと、せめては仰しゃってくださいますか。
- 27 貴方は君のその涙を拭ってあげよう、と仰しゃった。そこまでは何とか語ることができのですが、後は余りに思いがけなくて。
- 28 あの浜辺に吹き渡る夕方の松風を思い出し、扇を持って忍び泣いている私に、今年の秋のことなどお聞きなさらなくてください。
- 29 狂っている馬子に狂っている馬の手綱を持たせ、狂っている馬上の人に鞭を執らせましょう。
- 30 月の光が仄かな夜、あなたの名をそつと呼んでみたら、清水の畔に咲いていた百合の花が幽かに揺れて白露が散ったのでした。
- 31 とこしえに覚めないで、と蝶々が私に囁いていた、あの花咲く野辺で見た夢が懐かしく思い出されるのでした。
- 32 お聞きください。神様に引けを取らぬこの私の柔らかな胸の中で不思議な鼓動がするのを、その私の切ない心持ちを。
- 33 これは私の手作りの苺ですよ。貴方に含ませてあげましょう。その色が私の唇にさす口紅の色に似ていますので。
- 34 田舎の夜、母にも姉にも黙って家を出て、貴方が御覧になるかも知れないと、道の傍の合歡木にそつと歌を結んで来たのでした。
- 35 門の紅梅の木に微かに積もった夜中の淡雪が、折からの朝日で溶け始め、その木の下に佇む私の前髪は濡れてしまったのでした。
- 36 どこが悪いというのではないけれど琴の調べが落ち着かず、貴方に会うのも恥ずかしくなってきた、今日この頃の私なので。
- 37 私が何心なく摘んだ花草がとても優美な名前であったので、友達には誰にその花を贈るつもりなの、と笑いながら聞くのでした。
- 38 私は病気になってしまいました。姉と私が共に貴方を愛してし

- まったので、姉を妬む心とわが身をはかなむ心に苛まれています。
- 39 病気が直った髪を結って簪にして挿そうと言った、その白薔薇も、今では病み臥す私の枕辺にすっかり散ってしまいました。
- 40 野に出でて小百合の上に置く白露を吸ってみました。すっかり衰えてしまった私の血の気が再び胸に湧き上がるかと思つて。
- 41 世間が惨く私に当たるなら当たればいい。私は暖かい光も知らず、ただ土を掘り続ける土竜のように生きていくばかりです。
- 42 何と優しく思いやりのある蝶々でしょうか。朝露に濡れた羽を必死で動かし、実もつけない瓜畑の花々にも巡つて来たのです。
- 43 雲が切れ、ほの見えた夕暮れの空に、星が流れて行きました。心に懐いている望みが叶うように、と私は神様に祈るのです。
- 44 蠟燭の光を集めたかのように咲く夜の牡丹のなんと美しいこと。その牡丹を妬む女性の、これまた何と若々しく美しいこと。
- 311 私が息を吹いて暖めた玉のような梅の蕾。そればかりが一つ、ほのかに匂い始めたのです。
- 45 私たちは神から数々の玉で彩られた美しい小琴を賜りました。さあ、みんなで唄を合唱し、芸術の神を讃えましょう。
- 46 女は指輪を抜き、それを土に投げ捨てて微笑んだ。涙の跡の残る、その人の顔はなんと美しいことでしょう。
- 47 美しいマリア様を母上と呼んで日々祈りを捧げた墨染めの若き尼僧も、いつしか年月を重ねて老女となりました。
- 48 誰かに差し上げよう、と思つて摘んだ百合合ではないが、聖書の上にそれを載せ、最後に貴方のことをお祈りしてみようかしら。
- 49 この地上には蛇の口や狐の眼など、異形のもものが溢れている。地上二尺の高見にいる貴方こそ、神に寵愛された方なのです。
- 50 天をさし神を求める弱々しい私の指は毒に病んで震えています。地上で栄える醜草たちよ、その醜草ゆえの栄えを祝うがいい。
- 51 姉上よ、妹の私の憂いに乱れた黒髪を飾る、この百合合を見てください。風に簞れ、雨に簞れた、この百合合の惨めさを。
- 52 垣根づたいの萩の小径、その下を僅かに清水が流れている。私は恥ずかしさに火照る頬をその清水で清めたのです。
- 53 決して受け取れぬお方からの手紙を海に投げ入れました。沈みもせず浮きもせず、手紙は途中で藻に絡まってしまいました。
- 54 子羊を口笛で集めたり鞭で追い回したりしながら、牧場暮らしの中で出来上がった唄を私は歌っています。
- 55 木屋街は灯りの影に、祇園は花々の影にと、小雨に暮れてゆく京の町々は、みなしつとりとした柔らかな風情に沈んでいます。
- 318 袖をかざし京の桜は見えないようにした。それからの私は紅をさしたり着飾ったりする喜びを知らないままに年取ったのです。
- 56 世間の風は私のうす肌には冷たすぎます。私を可哀想と思われらるなら、どうぞ貴方の袖で私を永久に守ってください。
- 57 貴方の利鎌で刈り取られても私は構わない。貴方が背負う籠の中の小草の一つとして、せめて私は仄かな匂いを出しましょう。
- 58 色が濃く、笑いこぼれるように美しく咲いているこの花は、くださったお方になんとまあ似ていることでしょうか。
- 59 篝火の中、舞う私の持つ扇が微かに風を引き起こす。その風に

- 揺れる篝火は百本の牡丹の花が揺れているかのように見えます。
- 60 前世の報いか、人からの怨みなのか。生まれてからこの方、私には幸せの数を数えることなど、許されていなかったのです。
- 61 私は一人この地に残されました。泉は涸れ、花は枯れて荒れ放題のこの園生に、何を守って生きていけというのでしょうか。
- 62 天と地に掛かる虹はやがて消えるでしょう。しかしこの地とこの空と夫を恋しく思う私の心は何時までも消えはしないのです。
- 63 貴方は月に去ってしまいました。私は磯の潮になろう。いつしか潮が引いて月へ続く道になり、貴方に会えるかも知れないのだから。
- 64 貴方の帰りを待っているでもなく待っていない訳でもない夕暮れの道。ひとの御車がなぜか無性に懐かしく思われるのでした。
- 65 今の私には生きるべき世はなく、加護してくれる神も仏もない。運命の神よ、いっそ鋭き斧を振るって私を殺してください。
- 66 赤々と燃え上がり、やがて色あせて消えて闇の色と一つになるあの夕焼けは、貴方の人生そのもののようです。
- 67 貴方の御霊が帰ってくるならば、いかに寒気の烈しい夜であろうと、貴方のお墓を千日でも万日でも抱き続けるつもりです。
- 68 思い出してはならない、あの鞭の傷はひたすら心に秘めて怨み死にしよう。私はそれを隠せるだけの長い袖を持った少女です。
- 69 夕方の庭のどこに立って私は貴方を捜し求めたらいいのだろうか。葡萄を摘みながら唄を歌っていたその貴方の姿を。
- 70 貴方の手でスマイレを一本摘んで私にくださいませ。スマイレの花には二人の思い出が一杯に詰まっているのですから。
- 71 スマイレの花が咲いたなら、二人の髪に挿してみましよう。スマイレの色は決して褪せはしないというのですもの。
- 72 新たに貴方が開拓なさった詩の世界。少しでもそれに貢献して貴方のお名前を輝かせた上で、私は死のうと決心しております。
- 73 手ずから摘んで髪に挿した、取るに足らない花でしたが、貴方にその花の名を問われ、思わず頬を染めてしまった私でした。
- 74 どこを歩き、どうやって帰ったらいいのでしょうか。一杯の花々が山を埋め、私の身体をすっかり取り巻いてしまいました。
- 75 誰のために作っている花輪なの、と貴方は微笑みながら仰しやり、その花の名前もお尋ねになったのでした。
- 76 手づくりの葡萄酒を無理にお勧めし、酔い心地の貴方に、ぜひ都の歌でも一曲、とお願いしたのでした。
- 77 お待ちした貴方は来なかった。歓迎の百合の花束を背にした馬の手綱を引き、私は夕暮れの野道をとほとぼと戻るのでした。
- 78 私たちは微笑んで火焰を踏むつもりだ。世間の指弾などものともしない。そんな二人の満ち足りた眠りを、さあご覧ください。
- 79 気づかれないように友には紅い花を譲り、私は背を向けて涙を隠しながら忘れ草を摘んでいたのです。
- 80 母君に幼い頃から親しんだ羽子板や毬などを隠されてしまいました。肩上げを下ろした私の着物の針目の跡も淋しげに見えます。
- 81 紅い地に金糸で刺繍した襟の着物を着た舞子をモデルに、ここに三月絵を描いていました、と京にいる友から便りがありました。
- 82 何かと添削に苦慮した私の歌をご返却くださいますよりも、ど

- うぞ貴方、その紅筆で雪の兔に眼を入れてあげてくださいませ。
- 83 決して見たり聞いたり、期待を掛けたり憧れたりほしくないようにしよう。たとえ、秋になり風が吹き虹が立ったとしても。
- 84 絹手鞠を作り始めた。芯に白い糸を巻き付けたところで春になってしまった。糸もつれあつてかがり縫いが思うに任せない。
- 85 立てかけて置いた琴が、ふと低く響いた。貴方のお袖の端すら触れさせてはならない、と黙っていたのに。
- 86 遊び心で路傍の糸柳の葉を繋ぎ合わせて置いたところ、誰がしたのでしょうか、その上の葉をさらに結んでありました。
- 87 散る花に小雨が降り、風の温さに春を感じさせるある日。今日の夕暮れには琴柱を外しましょう、と私は思うのでした。
- 88 春はまだ寒く、梅も紅い蕾の頃のこと。病むウグイスが梅の枝伝いに戸に寄ってきて、啼き声をたてています。
- 89 春の雲よ、まだ雛なのだから春への期待で幼い瞳を輝やかせてはならないよ、と私は袖でウグイスの籠を被い隠したのでした。
- 90 夕顔の花に片頬を寄せ、陶然として驕り高ぶっている人がいる。その姿が妬ましいと、星よ、もう少し近くに降りて来ればいい。
- 313 小鼓を打っている私は、とても春を謳歌する気持ちにはなれない。世の中の何を恋しく思っただけでいいのでしょうか。
- 91 飢え果てて身体に血が巡らず、筆も力あるものは生み出せません。あなた、どうか私に魔という文字を教えてください。
- 92 聖戦に向かう軍艦の帆綱に、錨綱に、どうぞ私の黒髪をお召しください。魔も絡んで力ある、千筋のこの黒髪を。
- 93 霜の降りた夜気のせいとか、古鏡が音もなくひび割れてしまった。そんな夜、烈しい鳴き声をたてながら鳥は黄泉に帰るのです。
- 94 カタツムリが庇に這い出して来た雨の日の二日続き。どこから種が飛んできたものか、屋根の瓦には撫子の花も咲き出した。
- 95 大変才気があるのにむざむざ浪費しているあの方は、たとえば罇のはいった瓶に旨酒を保存しているようなものです。
- 96 真白な羽根の鳥に、私は一枝の花を託しました。十里のあなた、武蔵の国にお住まいの貴女の許に届くように、と。
- 97 髪を撫で、この髪を鏡に写してみたい、と思う夜もありました。そんな夜は、夢の中の花園で白百合の花を摘みたいものです。
- 98 私の袖に春の光が当たるような、そんな華やかなことは再びないでしょう。艶やかな牡丹が無惨に剪られ鼓に添えられたように。
- 99 流れゆく雲に秋の愁いが感じられます。その愁いを葉に染めるかのような芭蕉の陰で、私は貴方を想って秘かに泣いています。
- 100 扇のように鮮やかな彩りの羽を広げた孔雀。その鳥の王者の振る舞いでたった埃を、春の柔らかな風が吹き清めていきます。
- 314 何もかも疑わず恐れない貴方は私を理解してくれるただ一人のお方。貴方の命を私にください。その奥に私を住ませましょう。
- 101 大原女のを売って京の町に響いていく。眠気を誘う午後、花の上には雨が降り出した。
- 310 激しく流れる雲の色を見て、若々しい海人の瞳は燃えていた。それを咎めてはなりません。
- 102 貴女は欄干に寄り、牡丹の花に額を寄せている。春の真昼から

- 夢心地の貴女の、何と美しいことよ。
- 103 幸せの形は、今霽の中に明確に浮かんできました。長年の夢もまたいつの間にか実現し、貴方にお会いすることができました。
- 104 薔薇が燃えて咲く中に白玉の涼しい音がする。私の胸の熱い心と冷たい心、その揺れる気持ちを未だ歌に表現できません。
- 105 取るに足らない私です。せめては女神の冠を飾る、あの白百合の一つとなつて、少しの光でも添えるようになりたいものです。
- 106 地上には私の影、空には愁いを帯びた雲。鳩はいずこへか飛び立っていく。秋の日はこのように暮れていくのです。
- 107 どうぞ空に掛かっているあの虹を手繰り寄せてください。その虹に巻かれてどこかへ行ってしまう私たち二人なのです。
- 108 毎夜戸に身を寄せ怨み泣いている寝れ髪のこの私に、どんな秋をお過ごしですか、と詩で問い掛けるのはどなたでしようか。
- 109 もし貴方に歌がありなら、海を渡る雨に言づけてください。私はこの地の夕、山の端に虹が掛かるのを心待ちにしましょう。
- 110 夕潮に揺れる玉藻の音が微かに聞こえる、かそけき秋の気配。そんな趣きを命とする歌ができたなら、と私は願っています。
- 319 私にとって歌は命です、涙は命です。胸は激しい痛みを秘めて悶えていたのです。
- 111 髪を長く靡かせ、茜色に染まっている雲は気もそぞろです。夕陽と風とが互いに雲に恋を仕掛けているからです。
- 112 ここは南国の若草の萌える春の牧場。牛を追う鞭の調子にも段々馴れてきて、作る歌さえも上手に出来上がります。
- 113 聖よ、その捧げられた百合や牡丹の美しい花嫁さえも不満足というのなら、いっそ野茨と共寝してごらん下さい。
- 316 桜の木の下でうたた寝をなさっている貴方、決してお目覚めなさいませぬ。貴方のごらんの夢を奪って私は死にたいのです。
- 114 白鳩も今は馴れて番で貴方の肩に止まるようになりました。貴方、どうか西国人としての歌をこれからも詠み続けてください。
- 115 きつとそうに違いない、と一旦は納得して疑いを収めた私だったが、夜にはまた疑いが蘇り、淋しく辛い涙を流しています。
- 116 貴方を恋しく想っているので、私の袖に当たる秋の枯れ葉の一枚にも涙が誘われます。夕べの風も黄色く見えます。
- 117 偽りで濁った私の涙がこの袖にかかるならば、これを断ち切り再び貴方とお会いしなもりです。私の涙は真実の涙です。
- 118 私が風呂上がりに化粧をしていると、窓に吊してある御簾が秋風に揺れる。御簾ごしに芙蓉の白さが浮かび上がる。
- 119 夕焼けに山々がまっ赤に染まっている。それは天の火によって書かれた、貴方を得た喜びに溢れた私の姿そのものなのです。
- 120 瓦を布切れに包んで偽りの重りとする、そんな秤の上に載せられて、私の才能は計量されたのです。
- 121 私の歌は小さい頃より、大人しく膝をつきあわせて母から学んできたのです、心そのままに歌ったものです、と答えるつもりです。
- 122 鑄型に流し込まれたのですから、一つの型、一つの色の、全く同じように作られた埴輪のように竈を出ましようか。
- 123 一人で過ごすには余りに淋しい秋の夜です、と書いたことが切

つ掛けで、貴方のことが幻に浮かぶのでした。

124 現実世界にはなく、ただ歌の中にだけ見ることが出来る幻想、その美しい世界こそ恋と呼ぶものです。

125 本を読み知識を売る、そんな者とは生まれて来ませんでした。

126 蛇の脱いだ薄衣を価値あるとする、そんな世に私は生まれたい。私の生命が燃えたぎっているこの胸には、美しく匂い立つ花の

ような思いが溢れています。

127 私達が触れ合えば、花は喜び領き交わし、浪は寄せては返します。枯木も青木も全山は、喜びで朱に染まっています。

128 私たちの思い出を、改めて華々しく飾りましょう。何かと非難する人たちに、私たちの歌い興ずる姿を見せて上げましょう。

129 歌のために罰せられた人がいた、それがこの輝かしい今の時代のことであつたと、千年後の人々よ、ぜひ目に留めてください。

130 先生と友と私が詠んで納得できたのですから、それでこの歌集は十分ですと、何かと非難する智者たちにそう言ってください。

131 ああ、畏れ多いことですと、心の奥に涙ながらに潜ませていた私の命は、強い声となって貴方に応えたのでした。

以上、あえて字数制限をしたために、多くは舌足らずの現代語訳になってしまった。また別な解釈が可能な歌もあった。語義がたどれず暫定的に訳した歌もある。論議の多い歌もある。それらについて一々付言はしなかった。それらの歌は次稿以降で改めて検討することにして、ひとまず筆を擱くことにする。

註①⑥ 赤見貞編『梅田雲浜先生墓碑誌』(小浜市郷土研究会 昭44・

11)

註②⑩ 橋本威「山川登美子の歌碑及びその碑歌について」(『梅花

女子大学文学部紀要31』平9・12)

註③ 『小浜町史』(小浜市郷土研究会 昭61・6)

註④ 法本義弘『佐久間挺長』(小浜市立図書館 昭62・11)

註⑤ 赤見貞『梅田雲浜写真小伝』(梅田雲浜先生顕彰会 昭51・3)

註⑦ 法本義弘『梅田雲浜』(小浜市立図書館 昭56・2)

註⑧ 「再び歌よみに与ふる書」(『日本』明31・2・15)

註⑨ 『蜘蛛の網』(若狭芸術振興会 昭46・2)

註⑪ 「若狭を謳う」実行委員会・福井県立若狭図書館学習センター

平12・4

註⑫ 「評論山川登美子(遺稿)」(『若狭人物叢書 山川登美子』

小浜市立図書館 昭46・4)

註⑬⑮ 坂本政親「秀歌鑑賞」(『山川登美子全集下巻』)

註⑭ 今野寿美「わがふところ」(『さくら来てちる』(五柳書院 平10・

3)

註⑯ 『新潮』昭52・12

註⑰ 「女流の歌を閉塞したもの」(『短歌研究』昭26・1)